

敬みて布勢の水海に遊覧する賦に和ふる一首

并せて一絶

三九九三番

藤波は 咲きて散りにき 卯の花は 今そ盛りと あしひ
きの 山にも野にも ほとときす 鳴きしとよめば うち
なびく 心もしのに そこをしも うら恋しみと 思ふ
どち 馬打ち群れて 携はり 出で立ち見れば 射水川
湊の渚鳥 朝なぎに 瀉にあさりし 潮満てば 妻呼びか
はす ともしきに 見つつ過ぎ行き 渋谿の 荒磯の崎に
沖つ波 寄せ来る玉藻 片搓りに 縵に作り 妹がため
手に巻き持ちて うらぐはし 布勢の水海に 海人舟に
ま梶櫂貫き 白たへの 袖振り返し 率ひて 我が漕ぎ
行けば 平布の崎 花散りまがひ 渚には 葦鴨騒ぎ
さざれ波 立ちても居ても 漕ぎ巡り 見れども飽かず
秋さらば 黄葉の時に 春さらば 花の盛りに かもかく
も 君がまにまと かくしこそ 見も明らめめ 絶ゆる日
あらめや

三九九四番

白波の 寄せ来る玉藻 世の間も 継ぎて見に来む 清き
浜辺を